

(株)パソナ 南部靖之グループ代表兼社長

農業がチャンスを作る。そのために 新しい労働力供給のシステムを作る

■フリーターを募つての農業研修、あるいは東京都心に「地下農場」を作つて話題を呼ぶなど、独自の手法で農業にアプローチしている(株)パソナ。

■人材派遣の立場から、現在を「雇用創出」の段階から「機会創出」の段階への転換点と位置付け、生産現場や付随業務への人材供給を目指す。

■その時代認識と戦略について南部靖之・グループ代表兼社長に聞いた。

農業は雇用の未開拓地 地下農場で魅力アピール

昆吉則 パソナでは一昨年、中高年の農業インターンシップを実施し、昨年はフリーターの若者を対象に秋田県大潟村で農業研修を行いました。これまで農業とは無関係だった企業が、そうした活動をするのは非常に有意義だと思います。

南部靖之 農業は世襲制で終身雇用が基本でしょうから、私たちからは

最も遠い世界でした。

しかし、日本の農業従事者は高齢化が進み、後継者不足も深刻と聞いています。もし、若者を農業ビジネスの担い手に育て、風を吹き込めれば、農業を新たな産業として復興させることが可能です。将来、農業を一般的な就職の選択肢に加えることもできるはずですよ。

私は農業が雇用のフロンティアになると確信しています。経営の担い手としてだけでなく、大規模な生産法人などに財務や営業、デザイン

といった付随業務の面で本格的な人材派遣ができるようになると考えています。

昆 先月には、本社を置くビルの地下に、土耕・水耕栽培施設「パソナO₂(オーツー)」がオープンしました。私は、この施設の技術協力者である東海大学の高辻正基教授と、20年以上前に話したことがあります。当時、教授は「農業は東京都心でやるのが最も効率がいい」と語っていました。ついつい経験主義に陥りやすく、周囲の見方も紋切り型になりがちなのが農業ですが、全く別の可能性、多様性を示していますね。

南部 本物の農家の方がかなり見に来ており、「こういう農業をやりたいかった」と言ってくれる人もいます。施設自体は、まだまだ試行錯誤の段

階ですが、都心の真ん中で人々に農業に触れてもらい、興味を持つてもらうのが狙いです。この施設から、消費者の家庭や一般企業に農業の魅力や楽しさをアピールできればいいと思います。

雇用創出から機会創出へ フリーターをどう見るか

昆 私は戦後の農業における経営者は農水省であり、ほとんどの農家は「自ら借金を抱えた作男」だったととらえています。補助金付きで稲作をするサラリーマンととえてもいいでしょう。

また、一部の法人経営が「立派」だともはやされ、行政のお墨付きを得たような形で存在します。しかし、内実は借金の山だったりりで、そ

の姿は農水省の「子会社」といってもよい法人もあります。

農業分野での雇用創出を考えているとのことですが、農業は果たして産業たり得ているのか。雇用の前提となる経営者がどれだけの人が問われるのではないのでしょうか。だからこそ、パソナのような会社が人材を送り出し、農業経営者を教育する意味があるとも言えるのですが。

南部 確かに従来は、産業があり、企業があつて、人は雇用されると考えられてきました。しかし、私はそうではないと提言しています。

私の若い頃はフリーターを「ブローター」と呼んでいました。両者の実態は似ていますが、明らかに違う点があります。一つは人数、フリーターはブローターより1桁多いのです。それと、今、新卒で3年以内の会社をやめる人の割合が30%を超えています。つまり終身雇用を彼らもう望んでいません。以前のように入社の知名度で就職先を決めたりもしません。

もともと、「終身雇用」「年功序列」は、企業の数で言えばほんの数%の大企業にだけ当てはまるものでした。中小企業の場合、今も昔も、いつ雇用関係が切れるかわかりませんが、アウトソーシング（外部委託）もごく普通です。

ところが、最近では大企業ですら、終身雇用や年功序列を廃止しつつあり、社会的に大きな変化が起きています。企業の側が雇用する、個人は雇われる、そういう主従関係は終わるでしょう。

本来ならば、変化に合わせた社会の意識改革や、新たな税制などの社会構造基盤が必要なのですが、政府はまだその必要性を認めたくないようです。その結果、フリーターたちが悶々とさまよい歩いているのが現状です。

私は会社を起こして以来30年間、「雇用創出」と言い続けてきました。が、これからは「機会創出」ではないかと思っています。若者たちは雇用さえがあれば何でもいいのではなく、自分の可能性を広げ、才能、能力を発揮できる機会を求めています。それらを作っていくことが、今後の我々の使命の一つです。

新規就農に プラットフォームを作る

昆 フリーターたちは少々わがままではあっても、精神的には自由な人々でしょう。彼らにチャンスを与え、真の職業人として鍛えていかななくてはならないわけですが、実際のところ企業側は低賃金労働者、つま

南部靖之

■プロフィール（なんぶ・やすゆき）

1952年神戸市出身。関西大学工学部の卒業前に人材派遣業を開始。以来、新たな就労や雇用のあり方を提案し続け、03年月東証1部上場。また、各地の大手企業とともに関東・関西雇用創出機構を立ち上げ、業界や産業の枠を越えた転職、再就職の実現を目指す。著書に「人材開国」「創業は創職である。」（共著）「この指とまれ」など。<http://www.pasona.co.jp/>





編集長 インタビュー

み食いの雇用としてしか、見ていないのではありませんか。

南部 問題はものすごくあると思いますよ。ただ、現代のフリーターには選択権があります。彼らは、給料が高くて会社にも束縛される就職ではなく、低賃金でも縛られない「しあわせ」を選んだのです。価値観が変わったのでしょう。だから、大企業の採用試験を受けもしない。

世間ではよくフリーターについて、「年金制度を崩壊させる」「税金を減らす要因になる」などと批判します。私はフリーターそのものが問題なのではなく、自分の意志で選んだかどうかだと思います。ある日、ふと気づいたら仕事がなくなっていたというフリーターも、なんとなく良い大学を出て大企業に入ったけれど、45歳で突然リストラされたという人も、同じなのです。

誤解されては困るのですが、我々がすべての面倒を見るわけではありませぬ。働く場を与えるのはスタートに過ぎず、むしろ一匹狼のインデペンデント・コントラクター（独立契約者）を育てたい、多様な働く場、選択性のある雇用体系を作りた

いのです。その選択の中に農業という機会、チャンスを加えようとしているわけなんです。

昆 実際、農業をしたいという人は非常に増えているようです。

南部 実際に農業を始めて満足している人も多いでしょうが、健康管理で問題を抱えたり、クレジットカードを持ってなくなったりと悩んでいる人がいるようです。そうした点で

ソナがお手伝いできればいいと考えています。

また、新規就農に当たって、バラバラに入ってもらうのではなく、私たちがプラットフォームを作る。その中で年金や福利厚生などのサービスも揃え、ホームに立った人たちに色々な種類の「切符」を売ることもできるでしょう。

農業に新時代到来 人材・労働力供給に変化

昆 昨年実施したフリーターの農業研修ですが、半年間のプログラムを終えて、成果はどうでしたか。

南部 当初は「ちゃんと朝早く起きられるか」と心配していたぐらいです。まずはよく頑張ったと思いますよ。事前に座学で理論的なことを学ばせ、仲間意識を持たせるための仕組みを作り、健康診断をしておくなどの準備をしたのが、よかったのでしよう。

個別の農業研修だと、やはり、都中で自信を失ったり、相談できる仲間がいなかったり、あるいは体調が悪くなったりします。それで不安が高じて長続きしないケースがあるのですが、今回は誰も脱落しなかった。行く前より、しっかりして帰ってききました。

昆 農業には教育的機能もあります。今の若いフリーターに不幸があるとしたら、職場で学ぶチャンスを奪われてしまうことですね。しかも、日本は他人に対する励ましや勇気づけが欠如した社会になってしまっている。農業に触れると、他の産業ではなかなか得られないことを学べます。お天道様の力を知り、土との付き合い方を知るとか。そこに産業としての農業の可能性もあると私は見ているのですが。

南部 面白いですよ。一般企業では得難い経験を積めると思います。企業的な農家で研修を受ければ、また違った様々なことが学べるでしょう。一石二鳥どころか、三鳥、四鳥になるかもしれません。

昆 今後、農業を通じて若者に働く場を提供できる人々がいるとしたら、ちょうど「農業経営者」の読者層と重なるのですが、彼らにメッセージはありますか。

南部 どのくらいの数の若者が飛び立つのか、まだわかりませんが、経営者の方々には新しい時代が来たのだと、まず理解して欲しいですね。これまで農業で「新しい」と言うとか、栽培方法や技術の話だったと思いますが、今後は人材投入、労働力供給の面で変化が起きる、新たなシステムができるのです。（まとめ秋山基）